

臨床倫理メデイエーション

国立大学法人山形大学医学部 准教授 中西 淑美

36 生きるために——生命と時間とナラティヴ

はじめに

2026年を迎えたが、この数年、世界は
いまだ平和とは言えない状況が続いている。
平和について考えるとき、「社会」「人間」、
そして「生」が深く関係している。この「生」は、
「生命」「生活」「人生」である。世の中に
は、「生きていていいのか」「何のために生き
るのか」と苦悩する人々が少なくない。今回
は、こうした問いに対し、「生きていく」こ
とはどういうことなのか、「生命と時間」
の視点から考えてみたい。

1. 生命と時間

広井良典氏の思想は「生命と時間」をテー

マに展開されており、医療・科学・文化の広
範な交点からの考察が含まれている。広井
氏は生命のあり方や生と死の根拠を、「時間」
という根本的な問いを通じて探究している。
この探究となる代表的著作が『生命と時間—
科学・医療・文化の接点—』(1994)である。
この中で、これまでの生命観に新たな視点を
取り入れ、時間意識と生命観を結びつける重
要な議論を展開している⁽¹⁾。

広井氏の主要な視点は、「時間を軸とし
た生命理解」である。彼は、近代科学が「機械」
と「生命」という二つの軸で発展してきた経
緯を踏まえながらも、生命を単なる静的な生
物学的存在として捉えることを退ける。その
代わりに、生命をダイナミックな「時間の旅」

として理解することを提唱する。そして、こ
の生命現象を探るために、時間の重層構造と
いう視点を導入し、その複雑な構造を通して
自己(内面)と世界(外面)の関係性を考察
している。

そのうえで、次に、「医療と環境モデル」
に言及している。ここでは、医療における「成
果」「研究や診療ガイドラインを分析し、生命
を「医療モデル」と「環境モデル」という二
つの側面から捉える重要性を指摘している。

広井氏が説く「医療モデル」と「環境モデ
ル」の統合は、生命を単なる技術的・生物学
的対象としてではなく、環境や社会との中で
捉え直す視点である。これは、前述の「生命」
と日々の「生活」を結びつけることで、時間
の捉え直しへとつながる重要なステップと考
えられる。議論は「生」の行きつく先として
の「死」へと進み、「死生観と時間」に言及
される。

死生観と時間——生と死の連続的理解

広井氏は著作「死生観を問ひなおす」(20
01)などで、生と死を、時間を通じて断絶

社社会の基盤を提示することになる。

広井氏の議論は、「生命＝時間の旅」とい
う視点を提示することで、従来の生物学的な
生命理解を超え、医療倫理から社会哲学まで
幅広い領域に応用されている。

筆者の研究との接点

特に、広井氏の議論が持つ「時間の有限性」
や「生命の尊厳」という核となる概念は、筆
者の教育・研究テーマとも接点をもっている。
例えば、臨床倫理・メデイエーション・協働・
共同・共創・安全・対話・ナラティヴである。
広井氏の提示する時間を通じた生命の連続的
理解の枠組みは、医療現場における限られた
時間の中で、患者、家族、医療者がいかに対
話と協働を築き、倫理的な意思決定を行うか
という点を考察する上で、極めて有効な参照
点となっている。

2. ナラティヴ

——個人の存在の深淵への扉

ナラティヴ(意味と意味の循環)と生命・
時間の関係は、個人の生の経験を「時間の流

れの中で意味づける営み」として理解するこ
とができる。これにより、生命を単なる生物
学的存在としてではなく、「時間」を通じた物
語の構造として捉える視点が提示される⁽²⁾。
では、ナラティヴは生命や時間にとって、
どのような役割を果たしているのか。

ナラティヴは、断片的な出来事や経験を「時
間の流れ」に沿って再構成し、自己のアイデ
ンティティを形づくる営みそのものである。
生命が時間の中で進行し、必ず終わりを迎え
るという事実を踏まえると、ナラティヴは「生
の有限性」を理解するための重要な枠組みと
なり、死を含む人生全体に意味を与える役割
を担う。前述の広井氏の「生命を「時間の旅」
として捉え、医療や科学の成果を時間的文脈
に位置づけた視点は、このナラティヴの考え
方と響き合う。この視点こそが、患者の語り
や医療現場でのナラティヴ・アプローチと響
き合い、ナラティヴと生命と時間をつないで
いく鍵となる。

広井氏が、死を「わたしの死」として個人
の時間に位置づけ、それをナラティヴ的に理
解する枠組みを提示していることは、決して、

ナラティブ（意味と意味の循環）が、単純な物語や個人のヒストリーにとどまらない、その個人の存在の深淵の扉であることを示唆している。このナラティブの視点は、ナラティブ・メディスン（Narrative Medicine）との関連で特に重要である。ナラティブ・メディスンは、患者の語りを医療の中心に据える実践である。この実践は、生命を「時間の物語」として理解する広井氏の議論と高い親和性を持ち、ここでもナラティブと生命と時間が密接に融合していくことが窺える。医療は、ナラティブの視点を導入し、患者の体験を時間的に語り直すことを通じて、単なる技術ではなく「生の意味づけ」に関わる営みへと変貌する。

生命と時間に、ナラティブが重要である理由
ナラティブ（意味と意味の循環）が生命と時間の議論において重要な役割を果たす理由として、以下の3点が挙げられる。前述したように、生命と時間には哲学的意義・医療的意義・文化的意義がある。

ナラティブでの哲学的意義とは、社会と自

我の再評価である。ナラティブを通じて生命を時間の中で理解することは、近代的自我のあり方や、現代社会が目指すべき社会の持続可能性を根底から再考する基盤となる。

次に、ナラティブの医療的意義とは、倫理的営みへの拡張になる。患者の語りを尊重し、その体験を時間的な物語として受け入れることで、医療は単なる技術提供の場から、「時間の中の生命」を扱う倫理的営みへと拡張される。

さらに、ナラティブに、文化・社会的意義があるのは、持続可能な社会の基盤に、個々のナラティブが影響するからである。死生観や幸福論といった人間の根源的な問いを「時間の有限性」とナラティブに結びつけることで、私たちは持続可能な福祉社会の基盤を提示することが可能になる。

結論として、ナラティブは、広井氏の提示した生命と時間を結びつける「意味の枠組み」として機能する。そして、広井氏の展開した一連の議論は医療倫理や死生観の理解において、今後も重要な参照点となるだろう。

問生さることになる。

難病による時間損失のモデル化（日本の例）
厚生労働省の推計では、指定難病患者は約100万人程度（人口の約0.8%）とされている。ここでは、70歳までに難病を経験する確率を約1%前後と仮定する。

罹患期間の仮定

・難病は慢性化しやすく、診断後は生涯にわたり罹患するケースが多いことを踏まえ、「発症後平均20年間罹患する」と仮定する。
・罹患日数：20年×365日＝7300日
・罹患期間：7300日×24時間＝17万5200時間

全人口平均での時間損失

上記の仮定に基づき、全人口平均で見た場合の「難病による時間損失」は、以下の計算で求められる。全人口平均の損失日数＝罹患日数×難病発生確率＝7300日×0.01＝73日となり、結論（モデル計算）としては、人間が70歳まで生きると仮定した場合、この

モデル計算では、全人口平均で見て約73日が難病による時間損失となる。

生命と時間は、意外に時間的猶予があるので、ますます、生命と時間に、各人のナラティブを重要視していることは、生命だけではなく、生活や人生を考えていくことに繋がると考える。

まとめ 現代医療における生命・時間・ナラティブの重要性

本稿では、広井氏の議論を参照しながら、生命と時間、そしてナラティブ（意味と意味の循環）の関係性について考察を行った。

今日の医療の守備範囲は胎児診断・胎内胎児治療から、集中治療、終末期医療、さらには介護・福祉との連携下の医療にまで及んでいる。医療者には、患者中心の医療の実践、インフォームド・コンセントの徹底、クリティカル・クリニカルパスの実施、臨床・生命・研究倫理の履行、そして、医療安全を推進・学習する病院組織づくりなど、多様な活動が日々求められている。

一方で、医学・医療のテクノロジーは急速

3. 人間が70歳まで生きたとしたら、

総時間は何日・何時間になるのか
この問いを考える上で、重要なのは、「疾病によって失われる時間の割合」や、そのための「平均的な疾病発生率」をどう設定するかという点である。疾病は種類によって発症率や罹患期間が大きく異なるため、厳密な平均値を算出することは困難である。

70年間の総時間

人間が70歳まで生存した場合の総時間は、概略的には以下の通りである。

・総日数：70年×365日＝2万5550日
・総時間：2万5550日×24時間＝61万3200時間

70年は日数・時間の計算上、男女とも同じで、概算（平均）範囲（うるう年の違いによる揺れ）として、うるう年が17回なら2万5567日（61万3608時間）、18回なら2万5568日（61万3632時間）。

つまり、人間はおよそ2万5567～2万5568日、61万3608～61万3632時

なスピードで人工知能（AI）と結合して進歩しており、従来の医療者の役割の変更を求める時代に入りつつある。さらに、医師をはじめとした働き方改革が進行する中で、医療労働の中に埋め込まれていた父権主義的な患者・家族と医療者の暗黙の関係性も変貌を遂げ始めている。

このような複雑で転換期にある現代において、社会と人間、そして真の平和を考えるためには、生命と時間とナラティブという根源的な視点に立ち返ることが重要である。そこにこそ、私たちが日々直面する「生」の意義が見いだせるのではないだろうか。

おわりに 限られた時間の中の人生

私たちが「生」を人生と捉えなおすならば、「生」は生命と時間の連続の上に築かれる固有のナラティブそのものであると言える。

人生は有限であり、短い。この限られた時間をどう過ごすのか、その意味や価値は、最終的に個人の尊厳と価値観に委ねられる。

そして、その個人のナラティブを豊かにするために、社会全体が平和であることと、

安心して生きていくことのできる時間は不可欠なのである。

私たちが、この日々の時間の中で、自らの人生を見つめ、そこに込められた意味を問い続けられることを願う。



文献

- (1) 広井良典：『生命と時間―科学・医療・文化の接点』勁草書房、1994年
- (2) 広井良典：『死生観を問うなおす』ちくま新書、2001年
- (3) 広井良典：『生と死のグラデーション——「わたしの死」と死生観」『臨床死生学』25(1)、2020年、19—21
- (4) 広井良典：『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社、2019年
- (5) Kleinman, A. (1988). *The Illness Narratives: Suffering, Healing, and the Human Condition*. Basic Books.
- (6) Charon, R. (2006). *Narrative Medicine: Honoring the Stories of Illness*. Oxford University Press.